# プトレマイオス朝エジプトの動物埋納施設に関する考古学的分析

清水 麻里奈*

Archaeological Analysis of Animal Catacombs in Ptolemaic Egypt

Marina SHIMIZU

本稿では、プトレマイオス朝エジプトの動物崇拝が隆盛を極めるに至った要因を解明するために、奉納用動物ミイラが埋納された二種類の施設の分析を行った。まず、施設を検証し、開創時期から広伝過程を検討することで、プトレマイオス朝期に動物崇拝が隆盛を極めたことを示した。次に、このプロセスを解き明かすために、施設の拡張傾向に着目し、施設には数回の変革期があったことを説いた。また、新造のギリシア風都市では複数室型の施設が開鑿され、テーベ管区では倉庫型の施設が開創されたことも指摘した。これにより、施設には当時の在地民との共存をめぐるプトレマイオス朝下の政治と社会情勢が反映されていることを説いた。

キーワード：古代エジプト、動物崇拝、動物ミイラ、プトレマイオス朝

This paper analyzes two types of facilities where animal mummies were buried as votive offerings in order to determine why animal cults attained prosperity during the Ptolemaic Period. First of all, by examining the facilities from the early phase to their spread across Egypt, the result shows that animal cults reached their zenith in the Ptolemaic Period, at the end of the 3rd century BC. To better understand this historical development, research focused on the extension of the galleries which suggest that several transformations occurred over time. One such transformation was the multiroom-style facilities constructed in newly built Greek-style towns that are similar to the existing structures built during the Late Period. In contrast, magazine-style facilities were constructed in Thebes. This suggests that the facilities reflect the political and social situation of the Ptolemaic Dynasty a period of co-existence of local Egyptians with Greek immigrants.

Keywords: Ancient Egypt, Animal Cults, Animal mummies, Ptolemaic Egypt

## 1. はじめに

従来のプトレマイオス朝研究において、その統治（前 323–前 30）は、東洋的専制主義の典型例として評価されてきた。19 世紀以降の欧米の諸学者は、社会経済史的側面に焦点を定め、官僚主義に基づく王室経済や統制経済を論じてきたのである。そして、豊富なギリシア語史料を頼りとして、プトレマイオス朝が中央集権的国家構造であったことが通説視されるようになった（Rostovtzeff 1941）。しかしながら、ギリシア語史料のみならずエジプト語史料をも加えた場合、プトレマイオス朝はこれまで考えられていたような徹底した中央集権国家ではなかったことが指摘されはじめた（Manning 2003）。そこで近年では、これまでのギリシア語史料に依拠した旧説の見直しが求められており、考古資料やエジプト語資料から在地民の動向を考究することが重要となっている（Manning 2003）。その意味で、ファイユーム（Faiyum）出土のゼノン文書[1] から、エジプト人とギリシア人との共存情況を復元しようとした菊地のどかの論考は、時宜を得た好編として評価される（菊地 2019）。

このような見直しが進められつつある一方で、宗教研究の分野ではその射程が在地民の心性にまで及んでいない。既存研究では、国家の統合と結びついた王朝祭祀が注目を集めてきたのである。プトレマイオス朝が重視していた宗教はおおまかに、王朝祭祀を含む支配者崇拝と動物崇拝のようなエジプト固有の神々を祀る崇拝に二分される。前者はギリシアで萌芽した信仰であって、プトレマイオス朝とギリシア人やギリシア諸都市との相互関係の上に成り立った新来の祭祀である。一方、後者はエジプトの伝統に根ざし、在地民に深く受け入れられてきた伝統的宗教である。なかでも、初期プトレマイオス朝期において議論の俎上に載せられるオシリス神と聖牛アピスの習合したオセラピス信仰の創造[2] は、国家的祭祀体系のなかで解釈され、王朝主導の宗教政策であったことが広く認知されている（周藤 2014: 119–120）。

*名古屋大学大学院人文学研究科博士後期課程
PhD Candidate, Department of Humanities, Graduate School of Nagoya University



西アジア考古学　第 22 号　2021 年　91–107 頁 © 日本西アジア考古学会

しかし、プトレマイオス朝下のエジプト人たちは聖牛アピスのみを崇拝していたわけではない。鳥類、哺乳類、爬虫類などの多種多様な何千百万体もの動物ミイラがエジプト各地に設けた施設に納められたことを、考古資料が伝えているのである。したがって、聖牛のみならず、その他の動物にも焦点を当てた分析が求められている。さらに、これらの行為は、末期王朝時代（前 664 – 前 323）に興隆[3] し、後続するプトレマイオス朝期に隆盛を極めたことが知られてもいる。動物崇拝が在地エジプト文化に端を発した宗教であったことを考えると、プトレマイオス朝期における動物崇拝の諸相を明らかにする作業は、これまで十分には解明されてこなかった在地民の宗教的心性に迫る手立てとしてきわめて有効である。また同時に、動物崇拝における宗教慣行のエジプト的特性を解き明かすことができるならば、ギリシア系入植者と在地民との共存問題についても、その実態に迫る手立てとなるであろう。

そこで本稿では、動物崇拝に関連して開創された施設の考古学的分析を行い、プトレマイオス朝期に動物崇拝が隆盛を極めるに至った要因を考究する。

## 2. 動物崇拝

### 2-1. プトレマイオス朝期の動物崇拝

古代エジプトにおける動物崇拝とは、動物ミイラを介した神々への祭祀行為の総称である。崇拝対象とされた動物は、神聖動物と奉納用動物に区別されており、なかでも奉納用動物のミイラはその数の多さによって特色付けられている（Ikram 2005: 1, 10）。たとえば、サッカラ（Saqqara）の場合、トキ 400 万羽、ハヤブサ 50 万羽、イヌ 100 万匹を数え、その他の地域でも奉納用動物のミイラが夥しい数に上る施設は少なくない（Ray 1978: 151）。末期王朝時代の興隆は、これらの施設と動物ミイラの調査によって復元されたわけである（清水 2020: 88）。

外部勢力との交流がいっそう活況を呈した外来系のプトレマイオス朝下では、動物崇拝は末期王朝時代以上の隆盛をみせた。動物崇拝に関する多くの先行研究は、神聖動物である聖牛アピスを主たる対象にして、その高揚の背景をギリシア系入植者と在来民との宥和策に求めてきた（Stambaugh 1972; 周藤 2014）。すなわち、プトレマイオス朝下で聖牛埋納費用 100 タラントを神官が王に懇願した出土文書[4]、プトレマイオス V 世治世下のメンフィス決議における神聖動物の保護をうたった一文（*OGIS* 90）、神聖動物の聖牛アピスの埋納儀礼が豪華絢爛であったことを伝えたディオドロス・シクルスの記述を援用しつつ（D. S. I. 83–84）、先行研究では王権を首座に据えて、アピスなどの神聖視されていた動物への崇拝を論じてきたのである。

他方、奉納用と定義された多種多様の動物ミイラについては、その内実を示す文字史料が少ないことから、奉納の実態や社会的背景になお未解明の部分を残している。数は少ないがこれまでに蓄積されてきた議論を集約するならば、現世利益に基づいてそれぞれが相応の動物を購入し埋納したというサッカラの埋納施設を発掘した英国隊が示した説と、トゥナ・エル＝ジェベル（Tuna el-Gebel）の埋納施設を発掘した D. ケスラー（Kessler）が神学的解釈から説いた王朝祭祀としての崇拝行為説に大きく二分される。

前者の説によると、奉納用動物に関する崇拝は自身の願いを叶える神に対して祈願者が捧げる行為である（Ikram 2005: 9–10）。そのため、上述の神聖動物の崇拝とは異なり貧困者の宗教として形容される（Clarysse 2010: 278）。夥多の動物ミイラがエジプト中から出土し、さらに副葬品も多岐にわたることから、崇拝の主体者は各地の神殿に仕える神官であったと推測されている。すなわち、神官たちは祈願者が購入するミイラのためにさまざまな種類の動物を飼育し、一定の大きさに達すると意図的に殺す。そして、ミイラを製作し、奉納用動物として土器棺のなかに密封して神殿境内や近郊で販売していたというのである（Martin et al. 1981: 9）。また、奉納用に土器以外の棺材も用い、副葬品なども供えていたという調査結果を受けて、祈願者の現世利益を叶える各種の器材や製品の調達、さらには施設の拡充や整備を含む、広範な経済活動の存在も推測されている（Ikram 2015: 222, 226）。したがって、この見解を敷衍するならば、エジプト各地で出土している大量の動物ミイラは、祈願者が神殿を訪れた際に、現世利益を叶えるのに相応しい神々に対して捧げられた。また、このような祈願者の巡礼に際しては、さまざまな経済活動が付随していたというわけである。

これに対して、後者の王朝祭祀説を提示したケスラーは、祈願者個人が動物ミイラを購入し、埋納したことを推測させる史料が知られていないこと、また、個人のために神殿側が動物ミイラを準備し、埋納用器物の各種を提供していた証拠も見出されていないことを根拠として、上記の説に反駁を加えている（Kessler 2019: 561–562）。ケスラーはさらに続けて、奉納用動物は王朝による宗教的な儀礼行為の一環として使用された動物であり、在地民との関連はなく、動物は神殿内で飼育され、施設へ奉納されたと説く（Kessler 2019: 570, 576）。そして、一部は儀礼用に屠殺されることもあったが基本的には、動物ミイラは疑似のフェイク品も含めて神聖動物であったと指摘している（Kessler and el-Din 2005: 155）。

このように、プトレマイオス朝期の奉納用動物に対する認識は、研究者による大きな見解の相違があり、動物崇拝は王朝が主導した国家的祭祀であるのか、そこに在来の神官や庶民層が支えた在地的祭祀の存在を認めるのかという、当時の王朝下における宗教政策を考える上できわめて重要な問題が浮かび上がってくるのである。しかし、いずれにせよ、動物をミイラ化してそれを施設に納入する行為は、疑いなくエジプト固有の習俗であるから、在地民の心性に根差していたことは間違いない。そこで本稿では、対立する両説の上にさらなる議論を重ねるよりも、動物ミイラが納められた施設に眼を向け、崇拝の実際を復元するところから問題解決の見通しを得たい。

### 2-2. 神聖動物と奉納用動物

分析をはじめるにあたり、上述した神聖動物と奉納用動物について付言しておくと、現在、動物崇拝に関するさまざまな研究において、イクラムが提起した動物ミイラの4類型（愛玩動物・供物用動物・神聖動物・奉納用動物）のうちで「神聖動物」と「奉納用動物」が、広く流布している（Ikram 2005: 1）。イクラムによれば、神聖動物は顕現神であり、王と同等レヴェルの絢爛豪華な葬送儀礼を行っていた。これに対して、奉納用動物は神に捧げた動物であり、祈願者が現世利益を願ってこれを埋納したという。

このような定義の他にも、神聖動物をさらに二分する説もある。「全ての動物が神聖視されていた（Hdt II. 65）」と述べたヘロドトスの記述に依拠して、奉納用動物もまた神聖動物であったとみて、そのなかに上位と下位の別が存在したと説くのである。たとえば、A. ドドソン（Dodson）の場合、神殿で飼育し、納入時に特別な儀礼を執行し、その淵源が末期王朝時代よりも古く遡る一群と、奉納用として意図的に殺し、ミイラ化し、納入時に特別な儀礼を伴わない、末期王朝時代に登場する一群とに神聖動物を分けている（Dodson 2009: 1）。呼称はともかく動物の種別はイクラムに近い。また、ケスラーも神聖動物に順位を認めている（Kessler 1986: 571–572）。

したがって、イクラム説とドドソン説及びケスラー説とは、ともに動物に上下の順位を設けつつ、しかし、奉納用動物に神性を認めるかどうかという点で大きく相異するわけである。ここにも解けない問題が介在しているのであるが、神聖動物論者がヘロドトスの記述に依拠したことの可否は問わなければならないであろうし、また、ケスラーの神聖動物論の場合には、提唱した王朝主導説と一体とみて差し支えないので、筆者が進めようとしている以下の議論と抵触することにもなる。そこで、学史上問題になる神聖動物説の当否、イクラム説の適否、さらには上述した在地主導説の可否を念頭において、以下施設の実態について分析を進めて行きたい。なお、用語については便宜上イクラムの神聖動物、奉納用動物を踏襲しておく。

## 3. 施設

### 3-1. 先行研究とその問題点

現在の動物崇拝の研究において、最も多くの情報を提供してくれる遺物は動物ミイラである。19世紀以降、夥多の動物ミイラを奉納した施設がエジプト各地の遺跡から次々と発掘され、多くの動物ミイラが取り上げられた。また、近年では動物考古学者によって最新科学技術を駆使した詳細な分析がなされ始めており、たとえばマンチェスター大学は800体を超える動物ミイラのCTスキャンとX線調査を行った結果、多くの動物ミイラには骨などの動物性物質が含まれていなかったことを報告している（Mcknight 2010: 2112–2113; Atherton-Woolham and McKnight, 2014: 14; McKnight and Atherton-Woolham 2015）。このような動物性物質を欠く動物ミイラの製作理由は研究者によってさまざまであるが、その出土はサッカラ、トゥナ・エル＝ジェベル、テーベなど広域に及んでいる。また、動物ミイラの布巻きの様式がある程度均一であることから、ミイラ化は敬虔な祈願者の手によってではなく、職人によって行われていたと指摘されてもいる（Atherton-Woolham et al. 2019: 141–142）。このように、動物ミイラの知見を基として崇拝の実態が再検討されるに至っているのである。

ところが、施設については、ミイラに較べると研究の進展が捗々しくない。ケスラー著『*Die heiligen Tiere und der König, I.*』が偉業として立ちはだかっていることが、この現状をもたらしたことは否定できないところであろう（Kessler 1989）。本書のなかで、ケスラーはまず、末期王朝時代以降に動物ミイラが納入された施設を史資料から集成し、その数が120箇所に上ることを指摘した[5]。そして、宗教空間、すなわち、地上ならば入口付近、地下ならばそこに設けた礼拝場と、さらに一対のオベリスクと献酒場からなるオシリス神の聖域に対して建築学的な比較を行い、そこに共通点が見出されることを説いている（Kessler 1989: 222）。

しかしながら、ケスラーの対象はあくまで宗教空間であり、ミイラを納めた内部にまでは分析の手が及んでいない。また、ケスラーの大著は1989年に刊行され、現在に至る30年の間には新発見の施設が追加されている。彼の論考はたしかに動物崇拝研究上の偉業ではあるが、視点を替え、資料を追加して研究の進捗を図るべき時期にきていると評することができる。そ

表１　動物埋納・納置施設の集成リスト

| 地域 | 施設の形態 | 分類 | 施設の主要埋納動物 | 施設の使用時期 | 出典 | 図版 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| タプオシリスマグナ | 地下埋納 | 複数室型 | トキ, 猛禽類, サカナ | プトレマイオス朝期以降 | Dhennin 2008: 12-14 | なし |
| アブキール | 地下埋納 | 複数室型 | トキ, 猛禽類 | プトレマイオス朝期以降 | Muhammed 1987: Pl. 4; Aglan 2013: Fig. 35 | 図4. 5 |
| レトポリス | 地上埋置 | 岩窟利用型 | 猛禽類, トガリネズミ | 第30王朝期の使用確認 | de La Roque 1924; Kessler 1989: Abb. 23 | なし |
| アブ・ヤーシン | 地上埋置 | 既存施設型 | ウシ | 第30王朝期の使用確認 | Salam 1938; Snape 1986: Fig. 7; Kessler 1989: Abb. 24 | なし |
| アトリビス | 地上埋置 | 倉庫型？ | 猛禽類, トガリネズミ | 末期王朝時代－ローマ時代 | Rowland et al. 2013 | なし |
| メンデス | 地上埋置 | 神殿併設型 | ヒツジ | 末期王朝時代－ローマ時代 | Redford and Redford 2005: Fig. 7. 6; Redford 2010: 163 | なし |
| ヘリオポリス | 地下埋納 | 一室長型 | 雄ウシ | 第18王朝以降 | Spencer 1982; Dodson 2005: Fig. 4. 5 | なし |
| ハワラ | 地下施設 | 複数室型 | ワニ | 末期王朝時代以降 | Hdt II. 148; Petrie 1889: Pl. 25 | なし |
| サッカラ | 地下埋納 | 一室長型 | 雄ウシ | 第18王朝期－第25王朝期 | Ibrahim and Rohl 1988; Dodson 2005: Fig. 4. 4 | なし |
| サッカラ | 地下埋納 | 一室長型 | 雄ウシ | 第26王朝期－プトレマイオス朝期 | Dodson 2005: Fig. 4. 4 | 図3. 1 |
| サッカラ | 地下埋納 | 一室長型 | 雌ウシ | 前393－前41年 | Emery 1971: Pl. 13; Davies 2006: Fig. 5 | 図3. 2 |
| サッカラ | 地下埋納 | 複数室型 | トキ | 末期王朝時代－プトレマイオス朝期 | Emery 1965: Fig. 2; Nicholson 2005: Fig. 3. 5 | 図4. 1 |
| サッカラ | 地下埋納 | 複数室型 | 猛禽類 | 前360－前30年 | Emery 1971: Pl. 3; Davies and Smith 2005: Fig. 5; Nicholson 2005: Fig. 3. 6 | 図7 |
| サッカラ | 地下埋納 | 一室短型 | ヒヒ | 前404－前40年 | Emery 1970: Fig. 1, 1971: Pl. 2; Davies 2006: Fig. 13 | 図3. 5 |
| サッカラ | 地下埋納 | 複数室型 | イヌ | 末期王朝時代－プトレマイオス朝期 | de Morgan 1897; Nicholson et al. 2013; Nicholson et al. 2013, 2015: Fig. 3 | 図4. 2 |
| サッカラ | 地上埋置 | 既存施設型 | ネコ | 末期王朝時代－プトレマイオス朝期 | Zivie and Lichtenberg 2005 | なし |
| オクシュリンコス | 地上埋置 | 既存施設型 | サカナ | 第26王朝以降 | Mellado and Roca 2015: 124 | なし |
| ベニ・ハッサン | 地上埋置 | 既存施設型 | イヌ | 不明 | Leahy 1988: Pl. 26 | なし |
| アコリス | 地上埋置 | 岩窟利用型 | ワニ | 不明 | The Paleological Association of Japan 1995: Figs. 11, 12 | なし |
| トゥナ・エル＝ジェベル | 地下埋納 | 複数室型 | トキ | 末期王朝時代－ローマ時代 | Kessler and el-Din 2005: Fig. 6. 1, 6. 2 | 図4. 3 |
| トゥナ・エル＝ジェベル | 地下埋納 | 一室短型 | ヒヒ | 末期王朝時代－ローマ時代 | Kessler and el-Din 2005: Fig. 6. 1, 6. 2 | 図4. 3 |
| アシュート | 地上埋置 | 岩窟利用型 | イヌ | 第26王朝－ローマ時代 | Kitagawa 2016: Fig. 3 | なし |
| アビュドス | 地下埋納 | 複数室型 | イヌ | 不明 | Peet 1914: Pl. 18; Kessler 1989: Abb. 19 | 図4. 4 |
| アビュドス | 地上埋置 | 倉庫型 | トキ, 猛禽類 | プトレマイオス朝期以降 | Bestock 2012: Fig. 17 | 図2. 1 |
| ディオスポリス・パルヴァ | 地下埋納 | 複数室型 | トキ,イヌ | ローマ時代以降 | Capart 1927: 45; Kessler 1989: Abb. 18 | なし |
| アルマント | 地下埋納 | 一室長型 | 雄ウシ | 第30王朝期－ローマ時代 | Mond and Myers 1934: Pl. 3; Kessler 1989: Abb. 20; Dodson 2005: Fig. 4. 7 | 図3. 3 |
| アルマント | 地下埋納 | 一室長型 | 雌ウシ | 第30王朝期－ローマ時代 | Mond and Myers 1934: Pl. 4; Kessler 1989: Abb. 21 | 図3. 4 |
| デンデラ | 地上埋置 | 倉庫型 | トキ, 猛禽類 | 第18王朝期(?)-末期王朝時代 | Petrie 1900: Pl. 36; Kessler 1989: Abb. 17 | 図2. 2 |
| デンデラ | 地上埋置 | 倉庫型 | トキ, 猛禽類 | 末期王朝時代－プトレマイオス朝期 | Petrie 1900: Pl. 36; Kessler 1989: Abb. 17 | 図2. 3 |
| エレファンティーネ | 地上埋置 | 神殿併設型 | ヒツジ | 末期王朝時代－プトレマイオス朝期 | Kessler 1989: Abb. 16;  Delange and Jaritz 2013: Abb. 50, 51 | なし |
| バハリーヤ・オアシス | 地下埋納 | 複数室型 | トキ | プトレマイオス朝期以降 | Fakhiy 1950; Kessler 1989: Abb. 25 | なし |

こでまずは、エジプトに開鑿された地上・地下施設の形態と規模に注目して施設ごとの実態を検討する。

### 3-2. 地上施設

表1として示したデータは、すでにケスラーによって集成された遺跡のうえに、報告書や調査日誌等から存在が知られる末期王朝時代以降に開鑿された施設を加えた一覧である。本表の結果が示しているように、施設の分布はエジプト各地に及んでおり、とくにサッカラに集中していることが読み取れる。また、施設の立地は地上と地下に区分することができ、地上よりも地下の方が多い。なお、施設の使用時期については次節で詳述するが、上述したように、末期王朝時代からローマ帝政期までの約一千年の時間幅を有している。

まず、地上の施設であるが、これらの施設は地上に設けた施設であるため、おしなべて残存状態は良くない。しかし、例示した各都市からの報告を総合すると、地上施設もまた地下施設と同じくその年代は、概ね末期王朝時代からローマ帝政期にわたる間に編年して差し支えない。また、その分布は、地下施設と同様に広域に及んでいる。

エジプト各地に分布する地上施設を通覧すると、地下施設に較べれば形態上の変異幅が大きく、残存状況も良好でないことから、形態分類を行うことが難しい。しかし、施設の性格についてならば、ある程度の類型化が可能なようにみえる。たとえば、奉納施設を納置用倉庫として新造した例、既存の施設を転用した例、また、石灰岩の山塊を穿った岩窟神殿や既存の石窟墓に奉納の場を求めた例もある。地上施設例がさらに増加すれば、類型化を充実させることができるであろうが、さしあたっては、新造と転用に大別したうえで、新造は神聖動物が納置される神殿併設型と奉納用動物の倉庫型に、転用は既存施設型と岩窟利用型に二分して、それぞれについての知見を記しておこう。

まず、神殿併設型についてであるが、プトレマイオスII世治世下に建立されたメンデス碑文から、王はメンデス（Mendes）の聖羊が納置される施設に対して支援を行ったことが読み取れる（Cairo CG 22181）。この施設こそが、神聖動物が納置される地上施設であり、メンデスの他にも、エレファンティーネ（Elephantine）でも同様の施設が建立されている（Redford 2010: 163; Delange and Jaritz 2013: Abb. 50, 51）。施設内からは神聖動物を納めた棺も出土しており、メンデスについては施設の復元図が公表され

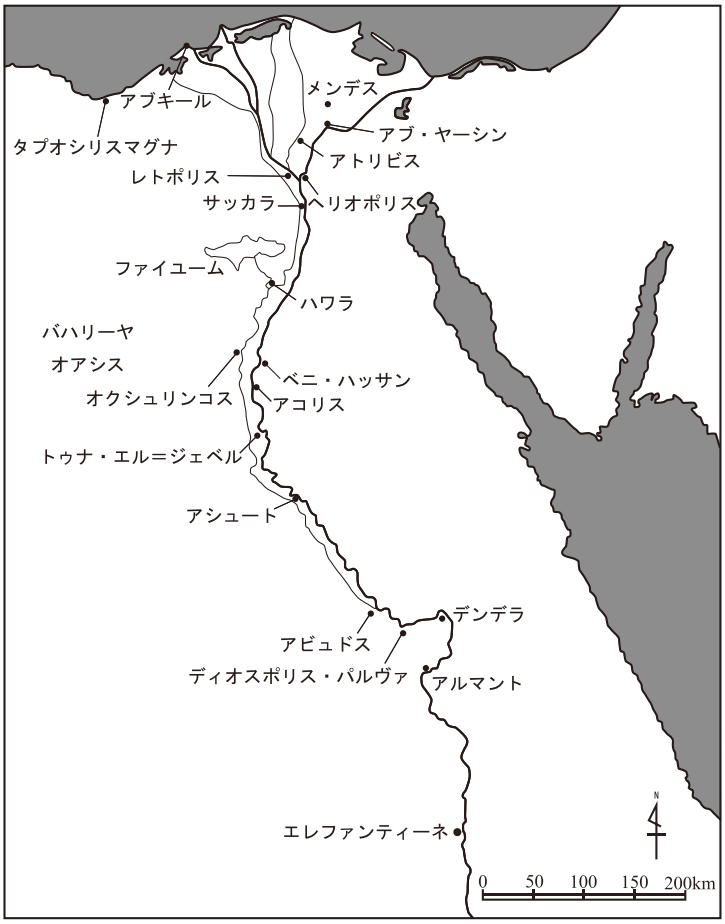


図1　分析対象とした動物埋納・納置施設が存在する遺跡

ている（Redford and Redford 2005: Fig. 7. 13）。

次に、倉庫型の場合は、砂漠地に切り込んだ泥レンガ造りのヴォールト構造であり、後述する地下埋納の複数室型と同様に奉納用動物をここに納置した。倉庫型と断定できる施設はデンデラ（Dendera）の2基とアビュドス（Abydos）の1基を合わせた3基である（図2）。主要路の両側壁に部屋を配したこの種の施設の由来について、A. J. スペンサー（Spencer）は岩盤があまりにも脆弱であったたせいで地下を掘削することができなかったのではないかと指摘している（Spencer 1982）。後述する施設の地域色の様態と北方デルタ地帯の地質からみて、スペンサーの指摘は的を射ているようにみえる。しかしながら、この形態の施設がアビュドスとデンデラという岩盤地帯のテーベ管区[6]に位置することを、スペンサーは触れていない。施設の地域色を抽出しようとすれば、この遺漏は問題になる。

先行研究によると、アトリビス（Athribis）北方近郊のケスナ（Quesna）にも倉庫型に類似した施設が知られている。ケスナのこの施設には、文字史料に記された末期王朝第31王朝期の神官ジェドホル（Djedhor）が飼育していた猛禽類たちを納置してあったという（Rowland et al. 2013: 55, 83–84）。東西165 m、南北17 mという非常に大きな規模であるものの、主要路とその側壁に部屋を付設していることから、イクラムはアビュドスの倉庫型施設と類似していることを指摘した（Rowland et al. 2013: 53, 74–75）。たしかに、泥レンガ造りの地上施設であり、倉庫型に類似している。しかしその一方で、部屋の長さが壁で仕切られつつ100 mを超えるというから、このような長い部屋は既知の地上施設例のなかには見当たらない。また、主要路の検出が不十分であるために、長い部屋が一筋に延びているようにみえる。さらに、施設内で確認されたサイロ状の円形遺構の存在も、上エジプトでは管見に上らない。発掘は完了していないが、現在判明している情況から判断する限り、少なくともこれを上エジプトと類似するような倉庫型の範疇に入れることは難しいといわざるをえない。

転用例に移ると、既存施設型で最も多いのは、個人墓を動物埋納施設に転用した例である。転用した理由を、かつての死者を顕彰するためとも、あるいは、墓の保有してきた聖性にあやかるためとも考えることができるであろう。墓に次いで多いのは地上施設である。地上といっても、岩窟に至聖所を穿ち、付属施設を野外に設けた例があるので、施設転用型と岩窟利用型を区別しかねる場合がある。また、墓の場合は主に地下であるが、ここにも岩窟利用型が含まれるので、岩窟利用型は地上施設と墓に跨ることにもなる。これらの転用施設に納置された動物ミイラの扱いは一様ではない。土器棺に納入したのが一般的であるが、他に棺を伴わない簡素な例や、少数であるがベニ・ハッサン（Beni Hassan）で出土したイヌのミイラのように木棺に収めた丁重な例もある（Leahy 1988: PL. XXVI）。ただし、既存施設の有無が確認できないために、施設転用例から外れる可能性が残る。

### 3-3. 地下施設

形を成す構造体として最多を数える地下施設は、確認できる動物ミイラの主たる埋納先である[7]。エジプトの岩盤の多くは石灰岩から構成されているため、地下施設をつくる際にはこの石灰岩質の岩盤を開鑿し、必要ならば泥レンガなどを使って適宜強度を補ってい

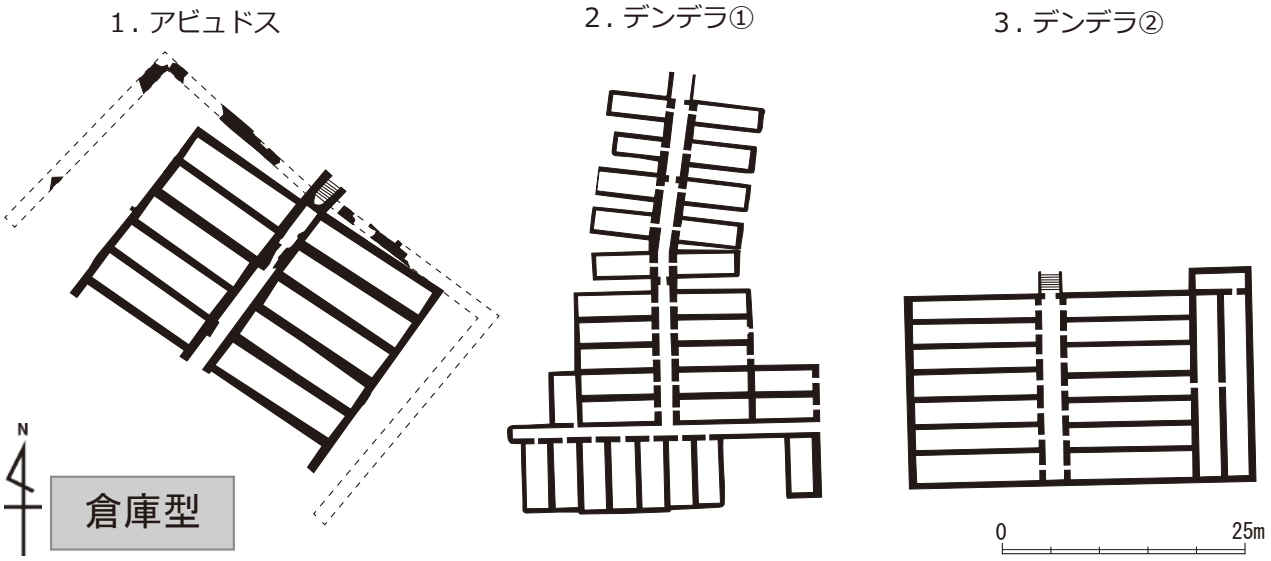


図2　倉庫型に該当する地上施設の平面図（表中の参考文献内の図版を元に作成）

る。施設の内部は、中心に幅の広い主要路を通し、その両壁に部屋を付設するのが基本的な形態であり、広く共通する点でもある。主要路の幅は1–4 m を測るので、広狭の差異が著しいが、棺の埋納が可能であったことを考えると、少なくとも棺の短辺長の幅を凌いでいたことは想像に難くない[8]。部屋形態の違いは著しいが、動物が埋納される部屋の形態に着目するならば、一室長型、一室短型、複数室型に分類することができる。

一室長型とは、聖獣1体のために1室を設けた形態であり、部屋の奥行きが2 m を超えており、部屋の総数が他の施設よりも少ない。サッカラのセラペウムとイセウム、アルマントのブケウムとその母ウシの施設が挙げられる（図3. 1–4）。いずれもウシ用であり、聖牛として丁重に扱った母ウシとその子供である雄ウシが埋納されていた。一室短型は、上記の形態と同様に聖獣1体のために1室を設けてあり、その奥行きが1 m 以下である点で、一室長型と異なる（図3. 5）。サッカラのヒヒ用施設がこれに当たる。トゥナ・エル＝ジェベルからもヒヒのミイラが出土しており、正確な位置は攪乱と盗掘によって不確かであるものの、ヒヒが主要路両側壁の龕に埋納された点から（Kessler and el-Din 2005: 144）、サッカラ例と同様な一室短型であった可能性を指摘できる。複数室型は、複数種の動物のために細長い部屋を設け、奥行き数十 m に及ぶ。部屋の数が多い点でも、長・短の一室型とは全く異なっており、神聖動物ではなく奉納用動物が埋納された施設である（図4）。

### 3–4. 施設からみる動物崇拝の広がり

地上と地下の施設に焦点を合わせて、それぞれに類型化を試み、各類型の属性について記述を進めてきた。その結果、各類型が一部重複しつつも固有の属性を備えていることが明らかになった。後述するように、各型式には時系列の変化がみとめられるので、以下、地下施設の場合には埋納、地上施設の場合には納置、両者を総称する場合には納入と呼び分けてきた先例を踏襲しつつ、時系列の盛衰を復元していく。

埋納・納置施設のなかには、末期王朝時代に開創され、少なくともローマ帝政初期の後3世紀まで約一千年にわたって継続使用された例が少なくない。また、層位関係が識別されていない例、もしくは後世の攪乱を被って開創時期を推定することが難しい例があることも、すでに指摘されている（Kessler 1989: 221）。他方、先行研究の蓄積に依拠するならば、動物埋納・納置習俗には、第26王朝、第30王朝、そしてプトレマイオス朝期という少なくとも3回の変革期があったことが判明している（Kessler 1989: 222）。そこでそれらの成果に基づき、施設の開創時期から取り上げることにする。

多くの研究者が開創の初現と推認しているのは、末期王朝第26王朝期である。第26王朝期末にエジプトを訪れたヘロドトスが、ファイユームの神聖動物であるワニの地下施設について記録しているから、遅くともこの頃にはすでに地下埋納が実行されていたことが窺える（Hdt II. 148）。また考古学的には、トゥナ・エル＝ジェベルでトキの地下施設が第26王朝期に稼動していたことが指摘できるので、在地での地下埋納もこの時期には始まっていたことが知られる。他方、地上納置に眼を向けると、アシュートの神聖動物であるイヌと、メンデスの神聖動物であるヒツジの納置は第26王朝期にまで遡ることができる。つまり、地下であれ、地上であれ、施設の初現はその時期を同じくしていたことになるわけである。動物埋納の初現を第26王朝期までは遡ることができるので、これを初現期とすると、動物埋納が図5から知られるような全土的盛行をみせるまでには、転機があっても不思議でない。末期王朝時代の地下施設の開鑿には、地域によって時間差がみられるというケスラーの指摘も、それを裏書きしているかもしれない（Kessler 1989: 222）。その意味で、伝統的信仰の中心サッカラで、第28王朝期（前404年以降）から新たに奉納用動物の施設が開鑿され始めたことは示唆的である。

周知のように、第28王朝は第27王朝（第1次ペルシア王朝）に対して反旗を翻して樹立した王朝であり、その王はアミルタイオス1人にとどまる。その後の第29王朝の王ネフェリテスI世は、自身を第26王朝の再興者と称していた。さらに、第30王朝期において、アルマント（Armant）にウシ用施設が開鑿されたこと、各地の動物崇拝関連施設で第30王朝の王名が確認されている事実を汲むならば、動物崇拝は中断されることなく継承されたことが窺い知られる。したがって、第28王朝の成立を転機として顕在化した反ペルシア＝伝統回帰の機運のなかで、それぞれの地において動物崇拝の伏流が湧き出るかのように勃興し、施設の新造・頻用として結実したことは、仮説としても充分検討に値する。

それでは、この盛期はいつまで続いたのであろうか。この問いに対する精確な答えを現在の考古資料群に求めることは難しいが、少なくともプトレマイオス朝期に隆盛を続けたことは推断してよい。第28王朝時代からローマ帝政初期に継続していたことが確認できるトゥナ・エル＝ジェベルのトキ埋納についても、プトレマイオス朝期の占める割合が大きい。また、使用時期を末期王朝時代からプトレマイオス朝期と報告している施設の例は少なくないが、個々の部屋を検討すると、多いのはプトレマイオス朝期であることが知られる。さらに、タプオシリスマグナ（Taposiris

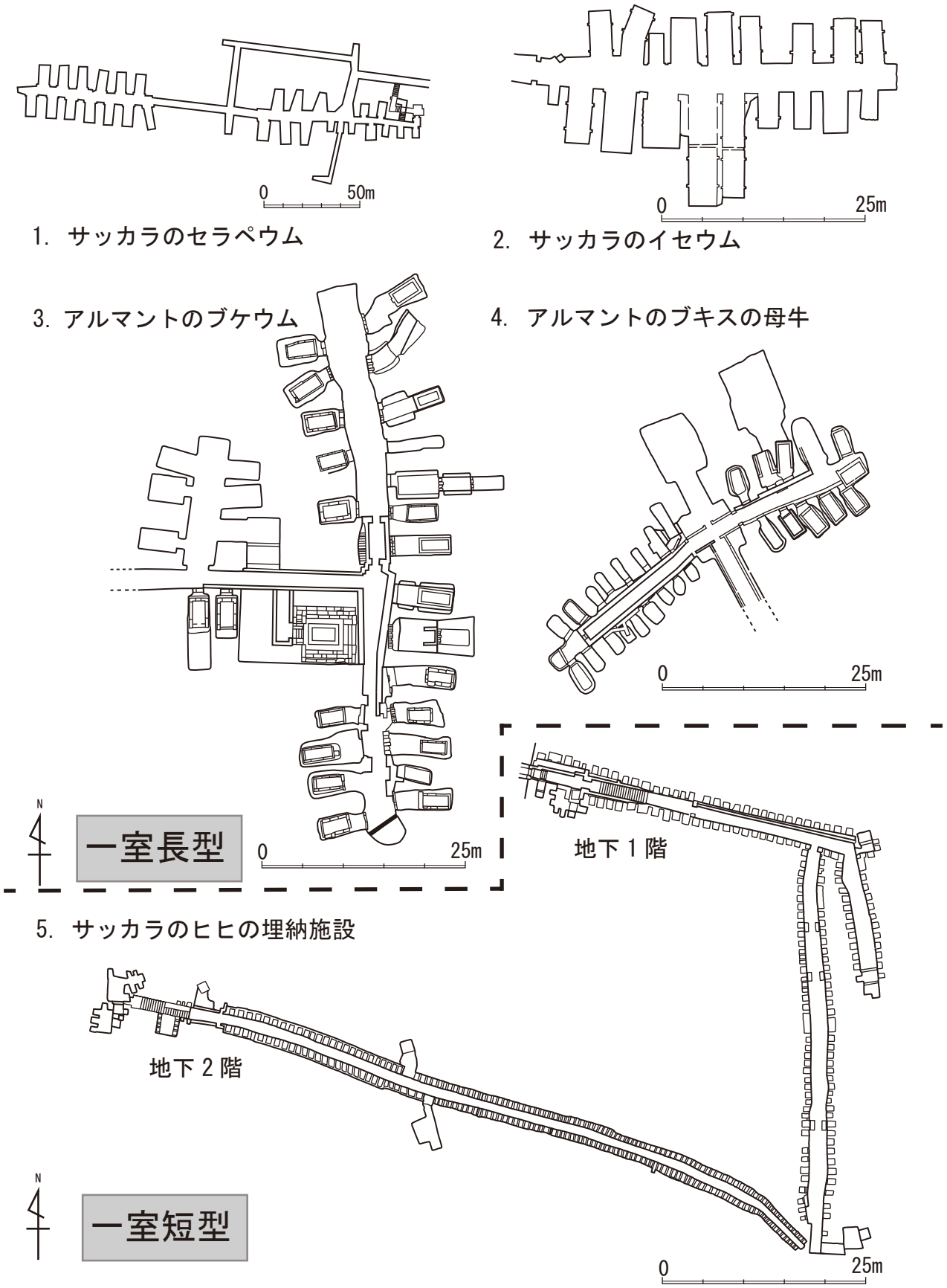


図 3　一室長型・一室短型に該当する地下施設の平面図（表中の参考文献内の図版を元に作成）

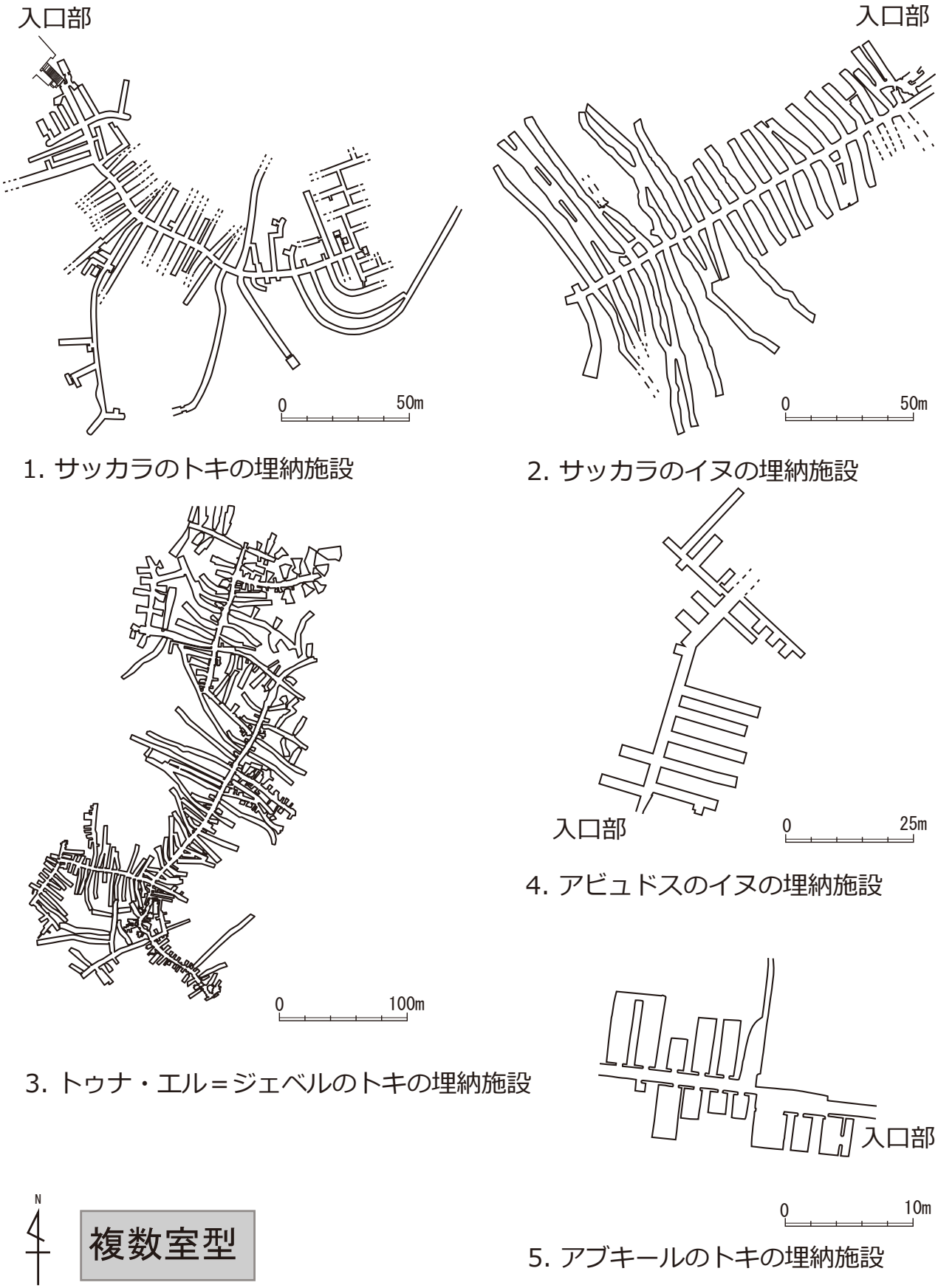


図４　複数室型に該当する地下施設の平面図（表中の参考文献内の図版を元に作成）

Magna）やアブキール（Aboukir)、そしてファイユームでプトレマイオス朝期に造営されたギリシア風諸都市で、埋納・納置施設が新たに設けられたことは、動物崇拝がもはやエジプト人のみならずギリシア系入植者にとっても関心のある宗教と成り得ていたことを物語っている。ところが、多くの施設から報告されているように、後期プトレマイオス朝期になると、ミイラのフェイク品が現れた。信仰の本源からいえば衰微の予兆でもあるこの現象は、同時に信仰のさらなる普及を推測させる[9)]。そして遅くともローマ帝政初期の後 3 世紀までは、動物崇拝がいっそう流布したことが察せられるのであるが、やがてキリスト教の教義や帝国側の主導によって崇拝行為自体が衰微していったようである。

施設やフェイク品の年代を手掛かりにすると、動物崇拝の流布情況は以上のように復元される。その結果から知られるのは、プトレマイオス朝期の動物崇拝は神聖動物のみならず奉納用動物も含めて隆盛を極めたことである。ギリシア系であるプトレマイオス朝がオセラピス信仰を創造するほど在地民への宗教政策に配慮し、しかし同神は民衆的同調を得られなかった。この点と比較するならば、動物崇拝のこのような著しい高揚には在地民の支持が強く働いていたに違いない。また、施設使用が王朝の交替を経てもなお存続して一千年にわたる例があることも、この同調に基づく民衆的支持の強さをよく物語っている。他方、動物崇拝には王朝の関与のあったことが説かれていた。それは疑いないところであるが、関与の実態についてはなお解明を経ていない。次章では各施設や動物種を詳述し、埋納・納置時の規定の有無を検証し、それを手掛かり

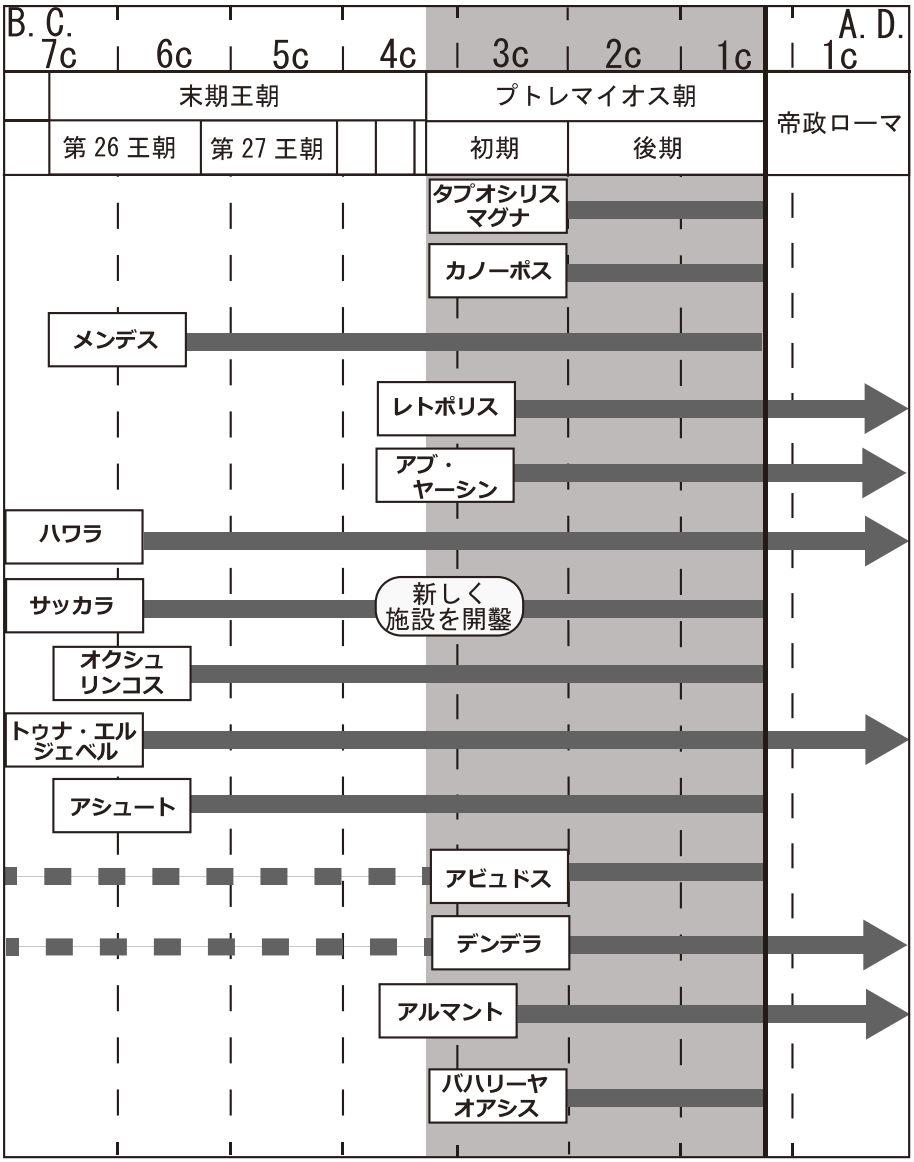


図 5　末期王朝時代とプトレマイオス朝期に開創された施設

にして関与の実態に迫りたい。

## 4. 施設の形態分析

これまでの検証によれば、奉納用動物は地下施設では複数室型に、地上施設では倉庫型に収められていた。それらの動物は、トキや猛禽類のような鳥類とイヌ科動物が多い。他にネコ科動物や爬虫類などが知られており、多種にわたっている。さらに、卵、鳥類の羽、葦や木枝で補強したフェイク品を加えるならば、種類はさらに増加する。奉納用動物は個体数ばかりでなく、種類数も卓越していたわけである。王朝の関与の実態で既存研究の見解が対立しているのは、この奉納用動物の認識についてであった。そこで、地上・地下に営まれた奉納用動物の施設に注目するならば、王朝の関与の実態をめぐる対立が解決に近づくかもしれない。本節では、この点を念頭において施設の分析を進めていこう。

### 4-1. 地上の奉納施設

倉庫型と名付けた地上施設が、地下施設の複数室型と類似し、主要路の両側に部屋を配する構造であったことは、すでに述べた。地下施設の複数室型では部屋の奥行きに著しい長短の差異が見られたのに対して、地上の倉庫型では奥行きがある程度均一であった。倉庫型の場合、構築素材が複数室型と違って泥レンガであることはいうまでもないが、随意に掘削し延長することが可能な地下の複数室型とは、開創時の規格性の点でも相異がある。

倉庫型の開始時期について、デンデラに営まれた同型施設2基を調査したピートリが、うちの1基を第18王朝期に編年したことがここで注意を引く（Petrie 1900: 28–29）。ピートリの編年によれば、倉庫型の開始は第18王朝期に遡ることになるからである[10]。しかし、その後の同種遺跡の調査と動物崇拝研究の進展によってこの指摘は否定され、末期王朝時代を初現とするのが穏当であるという（Kessler 1989: 221）。第18王朝にまで遡る奉納用動物の施設が他に報告されていないこと、アビュドスで発掘された倉庫型施設がプトレマイオス朝期に使用されていたことから、第18王朝説には無理があったというべきであろう。

倉庫型施設を代表するデンデラの2基とアビュドスの1基に関して、各部屋の床面積を算出してみると、デンデラの第2基に集団から大きく外れる値があることをさておくと、デンデラの第1基の中央値は他の2例に較べて数値が低い（図6）[11]。外れ値の存在は第2基に固有に事情があったことを暗示しているが、末期王朝時代の第1基がプトレマイオス朝期の2例に較べて狭いことは、年代の新古に置き替えることが許されるであろう。そして、プトレマイオス朝期における床面積のこの増加は部屋の奥行きの伸張によって達成されたことも、表示の結果から導かれる。

さらに、収納棺数について、地上施設での詳細は未だ知られていない。そこで、すでに情報のあるサッカラの猛禽類用地下施設の例を借用して推算してみる。この施設の場合、高さ50 cmほどの土器棺を横倒しにして同方向に並べ、100 cmの間に段積みで300–400個が収納されていた（Davies and Smith 2005: 8）。この結果を地上施設の部屋に外挿すると、デンデラ例の中央値（16.1 $m^2$）では4,830–6,440基、第2基のデンデラ例（29.2 $m^2$）では8,760–11,680基、アビュドス例（37.6 $m^2$）では11,280–15,040基を数える土器棺収納の動物ミイラが一室に納置できたことになる。すなわち、奥行きの伸長とは、収容棺数の増加要求を背景にして、それを実現する方途として発生した床面の拡張策であったというわけである[12]。プトレマイオス朝期における動物崇拝の動向を、先に隆盛と表現したが、地上施設における床面積のこのような増加は、まさにそれを裏付けているといえよう。

### 4-2. 地下の奉納施設

複数室型と呼んできた地下の奉納施設の類型は、必要に応じて掘削し施設を拡張することが可能であった。埋納室の奥行きに極端な長短が見られるのは、この類型に特有の施設拡張の所産である。部屋の総数は施設ごとで異なるが、少なくとも20室以上を数え、多い施設では60室ほどに上る。なお、通路＋部屋を埋納施設の構成単位とすると、トゥナ・エル＝ジェベルの場合、構成単位同士が結合し、しかも完掘されていないために、構成単位の区分も、正確な部屋数も定かにできないのが問題であるが、埋納ミイラ数が地上施設をはるかに凌いでいたことは疑いない。

プトレマイオス朝期における床面積の拡大は、地上施設だけにとどまらず、地下施設についても指摘できる。たとえば、トゥナ・エル＝ジェベルの場合、末期王朝時代に開鑿されたD区よりも、プトレマイオス朝期のB・C両区の方が奥行きが長い。また、サッカラのイヌ用施設でも、施設深部の部屋群は入口部よりも2倍以上も長いことが見て取れる。開鑿は入口部から始まり、次第に奥部に及んでいくから、この長短の相異は新古に置き換えることが許されるであろう[13]。

拡張時期についてもう少し論を進めるために、末期王朝時代末に開鑿が始まりプトレマイオス朝期末に閉鎖されたサッカラの猛禽類用施設を取り上げよう。この施設の封閉された部屋から出土したネクタネボII世の王名の刻まれた遺物などを年代推定の手掛かりにして、施設の存続期間を前360–前30年と見積もり、

| デンデラ① | | | デンデラ② | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 面積 | 長辺 | 短辺 | 面積 | 長辺 | 短辺 |
| 12.06 | 5.79 | 2.02 | 25.81 | 12.94 | 2.10 |
| 7.85 | 4.59 | 1.75 | 27.78 | 13.04 | 2.17 |
| 14.24 | 6.20 | 2.30 | 27.48 | 12.97 | 2.31 |
| 12.45 | 5.89 | 2.28 | 31.91 | 12.91 | 2.52 |
| 14.07 | 6.68 | 2.02 | 31.20 | 12.98 | 2.98 |
| 14.01 | 6.35 | 2.30 | 30.23 | 13.06 | 2.02 |
| 14.78 | 6.35 | 2.23 | 40.34 | 13.10 | 3.17 |
| 14.35 | 6.00 | 2.23 | 28.40 | 13.09 | 2.18 |
| 12.74 | 5.65 | 2.32 | 28.27 | 13.02 | 2.31 |
| 14.56 | 6.10 | 2.30 | 37.81 | 13.15 | 2.95 |
| 17.92 | 7.75 | 2.32 | 27.66 | 13.07 | 2.21 |
| 17.20 | 7.72 | 2.46 | 28.40 | 12.95 | 2.22 |
| 17.75 | 7.71 | 2.30 | 29.18 | 13.00 | 2.26 |
| 17.20 | 7.62 | 2.30 | 39.39 | 12.96 | 2.98 |
| 17.59 | 7.60 | 2.39 | 45.56 | 20.86 | 2.25 |
| 16.57 | 7.34 | 2.32 | 44.27 | 20.83 | 2.27 |
| 15.21 | 7.40 | 2.30 | 9.21 | 5.23 | 1.71 |
| 16.42 | 7.28 | 2.28 | アビュドス | | |
| 17.42 | 7.34 | 2.37 | 面積 | 長辺 | 短辺 |
| 16.94 | 7.36 | 2.30 | 36.94 | 11.76 | 2.86 |
| 14.22 | 6.03 | 2.37 | 35.31 | 11.89 | 2.97 |
| 14.13 | 6.05 | 2.30 | 35.79 | 11.75 | 2.97 |
| 13.03 | 5.43 | 2.38 | 36.90 | 12.09 | 3.00 |
| 16.53 | 7.36 | 2.16 | 36.34 | 13.67 | 2.80 |
| 17.14 | 7.40 | 2.44 | 38.58 | 13.69 | 3.00 |
| 17.52 | 7.76 | 2.29 | 39.06 | 13.62 | 2.88 |
| 19.54 | 7.70 | 2.50 | 39.03 | 13.58 | 2.98 |
| 18.28 | 7.79 | 2.53 | 40.27 | 13.69 | 3.00 |
| 16.89 | 7.46 | 2.30 | | | |
| 16.05 | 7.30 | 2.23 | | | |
| 14.34 | 6.25 | 2.30 | | | |

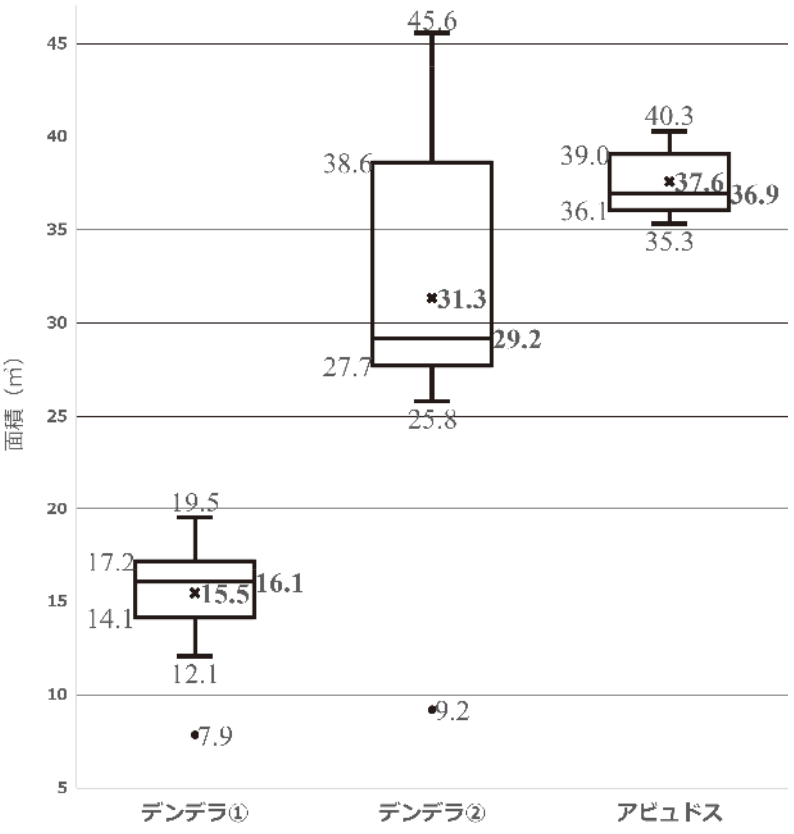


図 6　倉庫型である地上施設の面積比較

その間を精細に分期した S. デイヴィス（Davies）と H. S. スミス（Smith）の研究が注意を引く（Davies and Smith 2005: 30–40）。図 7 にある通り時期によって部屋の奥行きが異なっており、前 245 年までは最も長い奥行きでも 17.5 m ほどだが、前 245 年以降は 44 m を超える。この点から、伸長の転機が前 3 世紀末に訪れたことが見て取れる。先に例示したトゥナ・エル＝ジェベルの場合には、末期王朝時代とプトレマイオス朝期の間がこのような施設拡張の転機であったが、プトレマイオス朝期に入っても拡大の趨勢が止まなかったことを、このサッカラ例が示しているわけである。なお、前 3 世紀末といえば、後述するように、エジプトでは一部の在地民が王朝に大反乱を起こした時期であり、プトレマイオス朝支配の転換期に当たる。したがって、サッカラという王朝側の祭祀の枢要地でこのような施設の拡張が、大反乱と時を同じくして実行されたことは、歴史的意味があるのかもしれない。

## 5. プトレマイオス朝期の動物崇拝の様相

### 5-1. 動物崇拝の主体とは

地上・地下ともにプトレマイオス朝期に施設が拡張したことは、動物崇拝の隆盛を物語っているのであるが、このような隆盛が実現するためには、崇拝者の熱気の高まりがあれば足りるということではない。インフラ面でさまざまな準備が必要になってくるからである。しかも、インフラ総体の規模が末期王朝時代を大きく凌いでいたことは、崇拝の隆盛ぶりから察せられる。すなわち、施設の構築、動物の飼育やミイラ化、各種の棺や副葬品の準備が必要であり、奉納者向けの宿泊や食料も欠かせなかったであろう。参集者 70 万人、消費葡萄酒一年分とヘロドトスが記した「ブバスティスの祭礼（Hdt II. 60）」のような熱狂のなかで、もし動物ミイラの奉納が行われたとすると、それを支えるインフラの規模は更に大きなものにならざるをえなかったに違いない。

そこで問題となるのが、上記のインフラを準備して、動物の奉納行為の隆盛を可能にした主体者である。地下施設を例に挙げると、埋納施設は王朝時代から続く既存の都市のネクロポリスに例が多く、アレクサンドリア（Alexandria）やプトレマイス（Ptolemais）

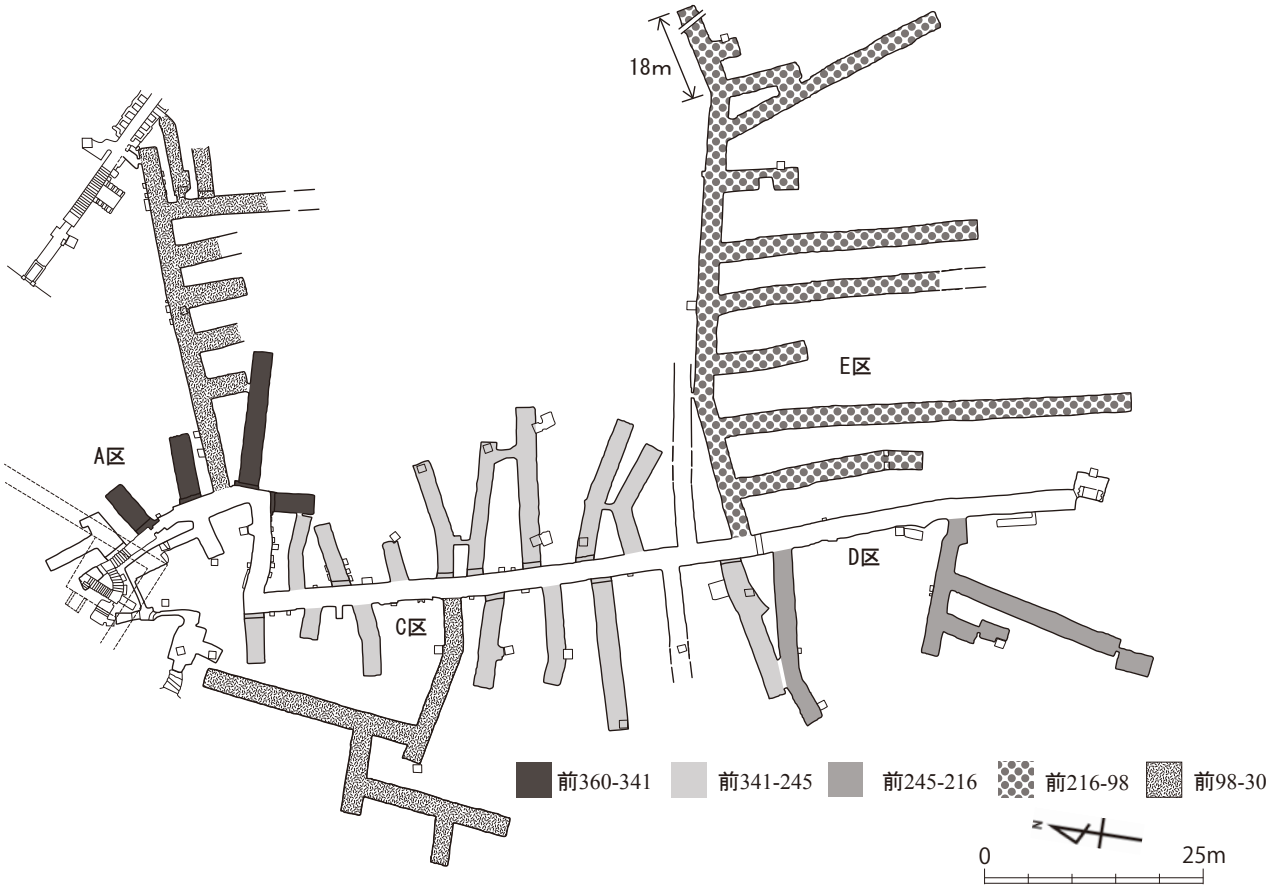


図７　サッカラにおける猛禽類の埋納施設の使用時期（表中の参考文献内の図版を元に作成）

のような新造都市例を凌いでいることが、既知の資料から明らかになっている。しかし問題は数の多寡ではない。サッカラ、トゥナ・エル＝ジェベル、アビュドスのような墓域では、末期王朝時代に興隆した奉納行為が隆盛の度を加えてプトレマイオス朝期に存続し、他方、アブキールやタプオシリスマグナのようなギリシア風都市にも動物崇拝の波がおよび、そこにも埋納施設が営まれたことが注意されなければならない。トキの埋納を例に挙げると、その行為はトゥナ・エル＝ジェベルだけにとどまらず、新造のギリシア風か、伝統色を帯びたエジプト風かという都市の体裁や由来に関わりなくエジプト中に流布しており、その施設の型式も類似している。このことは、新たに入植したギリシア系入植者もまた動物崇拝に参画していたことを物語っている。

そもそもプトレマイオス朝期におけるトキ崇拝は、特段の規模を具えたトゥナ・エル＝ジェベルの例を含め、施設や関連遺物の数が著しく多いことによって特色付けられる。トキのミイラはエジプト全土から出土するというケスラーの指摘通りである（Kessler 1989）。また、ギリシア系入植者の参画については、P. T. ニコルソン（Nicholson）の所説が示唆的である（Nicholson 2005: 44–45）。彼は、トキを代表的具現者とするトト神崇拝がサッカラで流行した背景に言及し、移民たちは彼らの医療の神アスクレピオスとトト神を同一視していたと説いているからである。

以上、トキ崇拝に見られるその流布ぶりと施設の類似度の高さ、さらには、崇拝の流行に伴うインフラ整備の増大を点綴すると、それらの背景に王朝側の関与が垣間見えてくることは避けられないところであろう。ただし、動物崇拝全体がことごとく王朝の関与のもとにあったのかどうか、この点についてはなお検証の余地がある。

### 5–2. 地上施設と地下施設の差異

動物崇拝施設の開創地を選択する際には、地上・地下を問わず、宗教上の意味が付加され、しかも在地社会の中核である都市の近傍が望ましかったに違いない。そこで今一度、奉納用のみならず神聖動物用の施設も加えて、施設開創地を通覧すると、都市近傍ではあってもその多くがネクロポリスの隣接地ないし内部に位置し、日常生活の場からは隔たっている。また、選地上の因子はそれだけにとどまらない。本稿で示した施設の半数ほどが地下施設であるが、そのほとんど

の選地から察せられるように、開鑿にあたっては、軟質石灰岩の岩盤が選ばれている。これに対して地中海岸寄りのデルタ地帯内部に営まれた施設は、地上に位置している。岩盤を穿って複数室型を設けた、地中海に面するアブキールの例はさておき、地下施設に相応しい地を選ぼうとすれば、比較的岩盤の堅いデルタ外縁に向かわざるをえない。デルタ内部で用地を確保しようとすると、メンデスやアトリビスの例が示しているように、否応無く施設は地上に営まれることになるのである。たとえば、神聖動物とみなされていたウシの場合、下エジプトではサッカラ、ヘリオポリス、上エジプトではアルマントのように地下に施設を、デルタ内部ではアブ・ヤシーンのように地上に施設を営んでおり、地上か地下かの決定因子は、ひとえに地盤の制約であったことが、ここからも察せられる。

ところが、奉納用動物の施設に焦点を当てた場合には、その事情が少し異なってくる。後述するアビュドスの例を除くと、地下の複数室型はサッカラやトゥナ・エル＝ジェベルなどよりも北に、地上の倉庫型はテーベ管区に位置している。営造地はともに岩盤であるから、地盤の制約を被っていないのである。アビュドスを除いたのは、地上施設と地下施設が併存しているからであるが、南方にあってこの地にのみなぜ両施設が営まれたのか、現在の史資料から答えを導き出すのは実のところ難しい。ただ、この問いに対する導きの糸は、プトレマイオス朝期におけるテーベ管区の政情にある。

テーベ管区は、プトレマイオス朝期の転換期として挙げられる前3世紀末に勃発した南部大反乱[14]の舞台であった。プトレマイオス朝はテーベよりもむしろ新たに建立した都市プトレマイス[15]を重要視し、何らかの政治的な意図のためにテーベとその神官たちを避けていたという（マニング 2012: 150）。これらの忌避を裏付ける事柄として、プトレマイオス朝は上エジプトの各地で神殿を新造・再建しているのにもかかわらず、テーベではそれを行っていないというマニングの指摘は、示唆的で重要な意味を内包している。さらに興味深いことに、南部大反乱時のテーベ軍にとって、アビュドスはその支配域の最北端であった（周藤 2014: 320）。したがって、施設の南北差が内包する問題は、宗教観の差異だけにとどまらず当時の政治・社会情勢を反映している蓋然性が高いのである。実際に、テーベのアルマントにおける聖牛埋納が初期のネクタネボ II 世期にピークを迎え、前3世紀末の南部大反乱時のみ埋納部屋が単純化し、一時的に簡略化することは既に指摘されている通りである（Mond and Myers 1934）。すなわち、動揺する時代相のなかで、王朝側とテーベ側のアイデンティティが交錯する政治・宗教上の因子が、複数室型と倉庫型の分布形成に反映しているというわけである。

テーベ管区に集中した地上の倉庫型は3例であり、北方の地下の複数室型は最大でも6例であるから、歴史的意味を導き出すことができる例数としては、けっして充分とはいえない。したがって、今後の発掘結果次第で分布状況が変わる可能性があることも、考慮に容れておくべきではあろう。また、テーベ勢力が地上を選んだ理由も解明されるべき問題として残っている。しかし、南部大反乱時におけるアビュドスの情況やテーベにおける神殿造営の遅滞とよく符合する点で、現在の資料から導かれたこの地域差は偶然として一蹴することができないのである。

## 6. 結語

プトレマイオス朝エジプトの動物崇拝は、神聖動物だけでなく奉納用動物をも含んで実修された広範で広域に及ぶ祭祀であった。そこで、本稿では奉納用動物が納入された施設に焦点を当て、埋納・納入行為がエジプト全土に広伝したプロセスを施設の開創時期によって復元し、この問題に新たな視点を提供した。その結果、施設の開創期は地域によって異なるものの、プトレマイオス朝期に全土で隆盛を極めたことが明らかとなった。さらに、この隆盛のプロセスを解き明かすために、施設の拡張に着目し、その契機が、プトレマイオス朝が樹立された前4世紀後葉と、転換期とされている前3世紀末に求められる可能性を指摘した。また、新造のギリシア風都市で既存の複数室型を踏襲した地下施設が開鑿されたことを問題にして、ギリシア系入植者の在地宗教への参画を示すとし、テーベ管区が倉庫型と呼んだ地上施設を営んで、北方とは異なる独自の型式に終始したことについては、新来の王朝側と在来のテーベ管区との軋轢がついにテーベ大反乱を惹起させた歴史上の事件がここに反映している可能性に言及しておいた。

あらためて本稿で当初設定した問題にかえると、奉納用動物を埋納する行為について未解決な部分が多く、先行研究では奉納用動物を埋納するという崇拝行為を王朝祭祀の一環とするケスラー説と、神官関与のもとで庶民層が現世利益を願って行ったと解釈する英国隊による説との対立があった。奉納用動物の施設に重点をおいて分析を重ねた本稿の結果から、エジプト各地に開創された奉納用動物の施設に斉一性を保持しつつ、テーベ方面と北方との間で地域差が認められること、この差異が政治的動向を投影しているらしいこと、しかし、主体者の如何にかかわらず動物崇拝は在地民からの支持があり、その心性的共鳴がなければ成立しえなかったこと、この庶民層のなかにはギリシア系入植者が含まれていたことが判明した。つまり、こ

れまでのような二項対立構造では、プトレマイオス朝期に動物崇拝が隆盛を極めた背景が浮かび上ってこないのである。この意味で、施設形態の存在から、プトレマイオス王朝側のみが動物崇拝に対して関与していた可能性が否定されたことは、本稿の帰結として強調しておくべきであろう。

宗教に経済活動が伴い、動物崇拝が神殿経済の自律と中間層の台頭を促したことは疑いない。したがって、動物崇拝に伴う経済効果をプトレマイオス朝がどのように収奪しようとしたのか、この点は関与の実態問題の一つとして今後解明されなければならないだろう。

**謝辞**

本稿は 2020 年 1 月に名古屋大学に提出した修士論文の一部を大幅に加筆修正したものである。執筆にあたっては、名古屋大学教授の周藤芳幸先生をはじめ、多くの方々からご教示を賜った。また、査読者の方々からは多くの貴重なご指摘を頂いた。ここに記して深く感謝申し上げたい。

**註**

1）ゼノン文書は、カリア出身のゼノンが保管していた 2,000 点を超える莫大なパピルス史料である。ギリシア語で記載された契約書や書簡などからなるこれらの史料群は、紀元前 3 世紀半ばのファイユームで展開されていた経済活動を詳細に伝えてくれる。

2）オセラピスの研究については、Stambaugh 1972 を参照。本著は、初期プトレマイオス朝期のメンフィスとアレクサンドリアという二つの都市で、オセラピス像の描写とその信仰対象者が異なっていたことを指摘している。

3）なぜ興隆に向かう転機が末期王朝時代に訪れたのかについては、外部世界からの入植者の流入に伴うエジプト国内での文芸復興活動の一環であると認識されてきた学史的経緯がある。すなわち、S. イクラム（Ikram）は、ヌビア、リビア、ギリシアやペルシアとの交流がいっそう活発化した末期王朝時代に興隆期が訪れることから、外部勢力に対してエジプト固有の宗教と諸文化の力を主張するために台頭したのではないかと指摘している（Ikram 2005: 7–8）。

4）ゼノン文書の中の、アフロディーテの神官からアポロニオスへの手紙の中に当該事項が記されている（PSI IV 328）。

5）ケスラーはデルタ地域の不確実性を主張しており、不確実な動物ミイラの出土地をも含めると 130 箇所を超えることを指摘している（Kessler 1989: 17）。しかし、その全てで特別な施設の存在が知られているわけではなく、多くの動物ミイラは施設を有さない土壙墓の型式で埋納されていたという（Kessler 1989: 17）。

6）テーベ管区（テーバイス）は、テーベを中心とする上エジプトの名称であり、エピストラテーゴスによって監督される行政区域の一つである。

7）現存する考古資料において、神聖動物を埋納する最古例は、サッカラの小型ヴォールトである。当該遺構は、第 18 王朝から第 25 王朝の間に使用され続けた集合動物埋納例であり、通路の両側壁に部屋を開鑿している。なお、19 世紀の発掘調査によってその天井が崩落し、入口部が塞がれてしまっているため、現在は第 26 王朝以降に開鑿された大型ヴォールトのみ入場可能である。

8）後述する一室長型の施設では、棺の納入を考慮した主要路幅の分析が行われている。K. フレイザー（Frazer）はセラペウム出土の棺（幅 2.32 m）を元手としてイセウムの棺の寸法を復元しており、それによれば、イセウムの幅は 1.9 m ほどであったという（Frazer 2006）。イセウムの主要路幅は 3.3–4.3 m ほどであることから、棺幅に対して二倍程度の主要幅が必要であったことが推測される。しかし、残念ながら、一室長型において実際に棺が出土している例は多くない。

9）動物ミイラのフェイク品製作理由は研究者によって異なっている。たとえば、祈願者を瞞着する目的で神官団が偽造したとみる指摘（Ikram 2005: 14–15）、動物骨を含んだ正規品よりも安価で、貧しい祈願者向けであったとする説（Cornelius el al. 2012: 131–132）がある。これらの議論を発展させるためには、動物ミイラを求める祈願者側の要求に供給側が応えられなかったことによるのかどうか、そもそも祈願者がフェイク品と認識していたのかどうか、ローマ時代への移行に伴う社会・政治的情況の変化が生んだ産物であるのかなど、多角的な視野からの原因究明が求められる。

10）ピートリによれば、デンデラの倉庫型施設からは、第 18 王朝のハトホル神官の名が刻まれたシストラムが出土しているという（Petrie 1900: 28）。

11）各施設の奥行き（m）と面積（$m^2$）は報告書に記載のない場合、各発掘者が報告している平面図と Foxit Reader を使用して算出した。

12）デンデラでは第 1 基の 31 部屋の長辺の合計値が 211.25 m（埋納可能土器数：63,375–84,500 個）、第 2 基の 17 部屋の合計値が 229.16 m（埋納可能土器数：68,748–91,664 個）である。このことから、第 2 基では、部屋数が第 1 基よりも少ないにもかかわらず、第 1 基よりも合計値が大きいことが読み取れる。

13）イヌ用施設の長短それぞれの部屋の開鑿年代についてはなお検討をまたなければならないが、猛禽類用施設と同様に、入口部が末期王朝時代、深部がプトレマイオス朝期であった可能性は指摘できる。

14）南部大反乱は、前 206 年から前 186 年にかけてアレクサンドリアの王権に反旗を翻したテーベ管区を中心とする上エジプトの在地民の一部による反乱の総称である。エジプト人たちは、反乱の指揮官であったハロンノフリスを王に推戴し、独自のエジプト人の王を推戴することで半ばプトレマイオス朝の支配からの独立を達成するまでに至った。

15）プトレマイスについてはマニング 2012 を参照。プトレマイオス朝が領域部に建設したギリシア的な意味での都市はプトレマイスのみであるという（周藤 2014: 134）。また、ストラボンはプトレマイスをテーベ管区最大の都市であり、メンフィスに匹敵する都市として取り上げている（Strab XVII, 42）。

**略号**

D. S. = Diodorus Siculus, *Library of History*.
Dittenberger, W. (ed.) 1903–1905 *Orientis graeci inscriptiones selectae* (2 volumes). Leipzig.

Hdt = Herodotus, *The Histories*.
Godley, A. D. 1920 *Herodotus, with an English Translation*. Cambridge, Harvard University Press.

*OGIS* = *Orientis Graeci Inscriptiones Selectae* (2 volumes).

PSI IV 328 = Papiri della Società Italiana.
https://papyri.info/ddbdp/p.zen.pestm;;50
（2020 年 12 月 30 日閲覧）

Strab = Strabo, *Geography*.
Heinemann, W. 1917 *The Geography of Strabo*.

Cambridge, Harvard University Press.

**参照文献**

Aglan, H. E. A. 2013 *The Aspects of Animal Sanctification in the Graeco-Roman Monuments in Egypt: Study in Classical Influences*. Ph. D dissertation. Köln, Universität zu Köln.

Atherton-Woolham, S. D. and L. M. McKnight 2014 Post-Mortem Restorations in Ancient Egyptian Animal Mummies Using Imaging. *Papers on Anthropology* 23/1: 9–17.

Atherton-Woolham, S. D., L. M. McKnight, C. Price and J. Adams 2019 Imaging the Gods: Animal Mummies from Tomb 3508, North Saqqara, Egypt. *Antiquity* 93(367): 128–143.

Bestock, L. 2012 Brown University Abydos Project: Preliminary Report on the First Two Seasons. *Journal of the American Research Center in Egypt* 48: 35–79.

Capart, M. J. 1927 Rapport sur une fouille faite du 14 au 20 février 1927 dans la nécropole de Héou. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 27: 43–48.

Clarysse, W. 2010 Egyptian Temples and Priests: Graeco-Roman. In A. B. Lloyd (ed.), *A Companion to Ancient Egypt 1,* 274–290. Chichester, Wiley-Blackwell.

Cornelius, I., L. C. Swanepoel, A. Du Plessis and R. Slabbert 2012 Looking Inside Votive Creatures: Computed Tomography (CT) Scanning of Ancient Egyptian Mummified Animals in Iziko Museums of South Africa: A Preliminary Report. *Akroterion* 57/1: 129–148.

Davies, S. 2006 *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara: Mother of Apis and Baboon Catacombs*. London, Egypt Exploration Society.

Davies, S. and H. S. Smith 2005 *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara: The Falcon Complex and Catacomb, The Archaeological Report*. London, Egypt Exploration Society.

Delange, E. and H. Jaritz 2013 *Elephantine XXV: Der Widderfriedhof des Chnumtempels, Mit Beiträgen zur Archäozoologie und zur Materialkunde*. Wiesbaden, Harrassowitz.

Dhennin, S. 2008 An Egyptian Animal Necropolis in a Greek Town. *Egyptian Archaeology* 33: 12–14.

Dodson, A. 2005 Bull Cults. In S. Ikram (ed.), *Divine Creatures: Animal Mummies in Ancient Egypt*, 72–105. Cairo and New York, The American University in Cairo Press.

Dodson, A. 2009 Rituals Related to Animal Cults. In W. Wendrich (ed.), *UCLA Encyclopedia of Egyptology*, Los Angeles. http://digital2.library.ucla.edu/viewItem.do?ark=21198/zz000s5mbz.（2020 年 10 月 29 日閲覧）

Emery, W. B. 1965 Preliminary Report on the Excavations at North Saqqara (1964–5). *The Journal of Egyptian Archaeology* 51/1: 3–8.

Emery, W. B. 1970 Preliminary Report on the Excavations at North Saqqara (1968–9). *The Journal of Egyptian Archaeology* 56/1: 5–11.

Emery, W. B. 1971 Preliminary Report on the Excavations at North Saqqara (1969–70). *The Journal of Egyptian Archaeology* 57/1: 3–13.

Fakhiy, A. 1950 *The Egyptian Deserts: Bahria Oasis, II*. Cairo, Government Press.

Frazer, K. J. 2006 The Mother of Apis Sarcophagi and Their Introduction into the Vaults. In S. Davies (ed.), *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara*, 123–125. London, Egypt Exploration Society.

Ibrahim, M. and D. Rohl 1988 Apis and the Serapeum. *The Journal of the Ancient Chronology Forum* 2: 6–26.

Ikram, S. 2005 Divine Creatures: Animal Mummies. In S. Ikram (ed.), *Divine Creatures: Animal Mummies in Ancient Egypt*, 1–16. Cairo and New York, The American University in Cairo Press.

Ikram, S. 2015 Speculation on the Role of Animal Cult in the Economy of Ancient Egypt. *Apprivoiser le sauvage/Taming the Wild* 3: 211–228.

Kessler, D. 1986 Tiercult. In W. Helck and E. Otto (eds.), *Lexikon der Ägyptologie. Band 6: Stele-Zypresse*, 571–588. Wiesbaden, O. Harrassowitz.

Kessler, D. 1989 *Die heiligen Tiere und Der König, I*. Wiesbaden, Harrassowitz.

Kessler, D. 2019 The Economical and Theological Importance of the Birthplace of the-Ibis. *ISIMU: Revista sobre Oriente Próximo y Egipto en la antigüedad* 20: 553–583.

Kessler, D. and A. E. H. N. el-Din 2005 Tuna al-Gebel. In S. Ikram (ed.), *Divine Creatures: Animal Mummies in Ancient Egypt*, 120–162. Cairo and New York, The American University in Cairo Press.

Kitagawa, C. 2016 *The Tomb of the Dogs at Asyut: Faunal Remains and Other Selected Objects*. Wiesbaden, Harrassowitz.

de La Roque, F. B. 1924 *Rapport sur les fouilles d'Abou-Roasch (1922-23)*. Cairo, Institut Français d'Archéologie Orientale.

Leahy, A. 1988 The Earliest Dated Monument of Amasis and the End of the Reign of Apries. *The Journal of Egyptian Archaeology* 74/1: 183–199.

Manning, J. G. 2003 *Land and Power in Ptolemaic Egypt: The Structure of Land Tenure*. Cambridge, Cambridge University Press.

Martin, G. T., P. R. Blakey, H. Ward and W. B. Emery 1981 *The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara: The Southern Dependencies of the Main Temple Complex*. London, Egypt Exploration Society.

McKnight, L. M. 2010 *Imaging Applied to Animal Mummification in Ancient Egypt*. BAR International Series 2175. Oxford, Archaeopress.

McKnight, L. M. and S. D. Atherton-Woolham 2015 *Gifts for the Gods: Animal Mummies and the British*. Liverpool, Liverpool University Press.

Mellado E, P. and M. M. Roca 2015 Area 32 of the High Necropolis of the Archaeological Site of Oxyrhynchus (El-Bahnasa), Egypt: Fish Offerings. In G. Rosati and M. C. Guidotti (eds.), *Proceedings of the XI International Congress of Egyptologists*, 124. Florence, Florence Egyptian Museum.

Mond, R. and O. H. Myers 1934 *The Bucheum III, The Plates*. London, Egypt Exploration Society.

de Morgan, J. 1897 *Carte de la nécropole Memphite, Dahchour, Sakkara, Abou-Sir*. Le Caire, Le bureau de dessin au ministère des Travaux Publics.

Muhammed, A. Q. 1987 An Ibis Catacomb at Abu-Kir. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 66: 121–123.

Nicholson, P. T. 2005 The Sacred Animal Necropolis at North Saqqara. In S. Ikram (ed.), *Divine Creatures: Animal Mummies in Ancient Egypt*, 44–71. Cairo and New York, The American University in Cairo Press.

Nicholson, P. T., J. Harrison, S. Ikram, E. Early and Y. Qin 2013 Geoarchaeological and Environmental Work at the Sacred Animal Necropolis, North Saqqara, Egypt. *Studia Quaternaria* 30/2: 83–89.

Nicholson, P. T., S. Ikram and S. F. Mills 2015 The Catacombs of Anubis at North Saqqara. *Antiquity* 89 (345): 645–661.

Peet, T. E. 1914 *The Cemeteries of Abydos II: 1911-1912*. London, Egypt Exploration Fund.

Petrie, W. M. F. 1889 *Hawara. Biahmu and Arsinoe with Thirty Plates*. London, The Leadenhall Press.

Petrie, W. M. F. 1900 *Dendereh 1898*. London, Egypt Exploration Fund.

Ray, J. D. 1978 The World of North Saqqâra. *World Archaeology* 10/2: 149–157.

Redford, D. B. 2010 *City of the Ram-Man: The Story of Ancient Mendes*. Princeton, Princeton University Press.

Redford, S. and D. B. Redford 2005 The Cult and Necropolis of the Sacred Ram at Mendes. In S. Ikram (ed.), *Divine Creatures: Animal Mummies in Ancient Egypt*, 164–198. Cairo and New York, The American University in Cairo Press.

Rostovtzeff, S. 1941 *The Social and Economic History of the Hellenistic World*. Oxford, Oxford University Press.

Rowland, J., S. Ikram, G. J. Tassie and L. Yeomans 2013 The Sacred Falcon Necropolis of Djedhor (?) at Quesna: Recent Investigations from 2006–2012. *The Journal of Egyptian Archaeology* 99: 53–84.

Salam, A. 1938 Rapport sur les fouilles du Service des Antiquités à Abou-Yassin, Charquieh. *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 38: 609–622.

Snape, S. R. 1986 *Six Archaeological Sites in Sharqiyeh Province*. Liverpool, Liverpool University Press.

Spencer, A. J. 1982 *Death in Ancient Egypt*. London, Penguin Books.

Stambaugh, J. E. 1972 *Sarapis under the Early Ptolemies*. Leiden, Brill.

The Paleological Association of Japan 1995 *Akoris: Report of the Excavations at Akoris in Middle Egypt 1981-1992*. Kyoto, Koyo Shobo.

Zivie, A. and R. Lichtenberg 2005 The Cats of the Goddess Bastet. In S. Ikram (ed.), *Divine Creatures: Animal Mummies in Ancient Egypt*, 106–119. Cairo and New York, The American University in Cairo Press.

菊地のどか　2019「野心的な陶工たち：プトレマイオス朝時代のファイユーム出土パピルス文書から」『古代文化』71 巻 3 号　224–232 頁。

清水麻里奈　2020「古代エジプトにおける動物崇拝の盛衰」『古代文化』72 巻 3 号　88–97 頁。

周藤芳幸　2014『ナイル世界のヘレニズム：エジプトとギリシアの遭遇』名古屋大学出版会。

マニング、J. G.　2012「プトレマイス：プトレマイオス朝の失われた都市」『メタプティヒアカ：名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報』6 号　145–166 頁。